

アクションカウンセリングの理論と実践 The Theory and Practice of Action Counseling

赤井 美智子
Michiko Akai

(はじめに)

近年において、カウンセリングに対する期待と需要は、急速に拡大し、有能なカウンセラーの養成とカウンセリングの質的向上が強く望まれてきている。

筆者は、関係学(注1)の原理に基づく多様な心理劇の技法が展開し、独自の発展を遂げているアクションカウンセリングの有用性を提起し、多様な実践領域における発展的展開についての実践理論と技法を探究することを研究課題の一つにしてきた。本稿は、1996年度(後期)に本学より認められた国内研修期間における研修成果と、学外・学内でのアクションカウンセリングの実践研究とを統合してまとめたものである。

研究テーマであるアクションカウンセリング(心理劇的カウンセリング)とは、カウンセリング場面に心理劇(注2)を活用した新しいカウンセリングの一形態である。そこでは、クライアントの場面状況における気づき・発見を意識化・共有化し、日常生活へ展開可能な新たな関わり方の体験を認識レベルのみならずアクションレベルにおいても可能にすることにより、クライアントの日常生活状況における認識、行為の変化・発展をより促進することがめざされている。

(目的)

本稿では、アクションカウンセリングの実践研究を次の観点における分析と考察によって進める。

1. アクションカウンセリングの特性
2. アクションカウンセリングにおける心理劇の技法の活用とその効果
3. 一般的なカウンセリングへの導入の手がかりと手順

(方法)

文献考察と次の機関における実践・研究活動の過程、結果の分析・考察を行う。

- ・ K福祉作業所およびW障害児通園施設(埼玉県N市)において1990年以来実践している個別のアクションカウンセリング
- ・ 1996年度の後期に私学研修福祉会の国内研究員となり、お茶の水女子大学人間関係研究室

*The Course of Early Childhood Education

キーワード: カウンセリング, 心理劇, アクション, 三者関係

の研修生として参加した児童集団研究会、およびK福祉作業所におけるグループのアクション・カウンセリング

- ・ 十文字学園女子大学、女子短期大学における筆者の担当する社会福祉士養成科目におけるグループのアクション・カウンセリング

1. アクション・カウンセリングの特性

(1) アクション・カウンセリングの原理

アクション・カウンセリングは、自発性と創造性の理論を基礎にしている。アメリカのR. ハースはその著書の中で、アクション・カウンセリングの特性について、次のように述べている。

「心理劇的カウンセリングは、自発性と創造性の実証的な理論に基礎を置き、クライアントを活発にする特殊な演出の技法によって支えられており、以前のカウンセリングの諸手続きが示したものより、一層包括的な治療の基盤を明らかにするものである。この基盤に根ざしているのは民主的なカウンセリングに対して新しい出発点を提示するいくつかの傾向がある。——すなわちその傾向とは、言語的方法から行為的方法への変化、個人的方法から集団的方法への変化、および閉鎖的な治療状況から開放的な治療状況への変化である。」⁽¹⁾

上述のように、R. ハースはクライアントの自発性を高め、主体的にふるまいやすくするアクション・カウンセリング状況では、補助自我機能が展開する三者関係と、言語を含めた行為的、劇的手段の活用による行為レベルでのやりとりが重要な構成要素となり、より包括的な治療基盤が成立することの特性を強調している。また、言語的手段中心のカウンセリングとは異なるこのカウンセリングは、クライアントの実際の日常生活、集団状況において展開でき、日常生活の発展へ連結されやすいところにも、その有用性をとらえている。

アクション・カウンセリングは、心理劇的カウンセリングとも呼ばれ心理劇の創始者であるアメリカのJ. L. モレノにより広められた。日本ではJ. L. モレノに学びつつ、関係学を基盤とした独自性のある心理劇が展開するアクション・カウンセリングが多様な領域で研究され、発展してきている。

その基礎的原理は基盤となる心理劇の原理と共通であり、その中心的な4つの原理の概略について、「関係学ハンドブック」⁽²⁾に基づき、次に述べる。

A. 三者関係の原理

アクション・カウンセリングの場の構造は、三者関係を基本にして展開し、その力動的発展がめざされている。

三者関係とは、役割機能の異なる三者が出会って相互にかかわり合うことにより、新しい変化・発展状況が創造されるような関係構造を意味する。三者関係を担うのは、三人の人だけではなく、二人の人と物（課題、物、玩具）によっても成立する。

この三者関係の力動性、相互的發展性を積極的に活用するカウンセリングは三者面談法^(注4)と呼ばれている。

B. 未来志向性の原理

関係的に成立し、変化する状況の時相のどこにかかわることが、人間活動の発展をもたらすかを明確にする原理。

クライアントによって持ち込まれた関係の発展が阻まれているような問題状況についての相談課題は、現在、今、ここでの関係において、新しく出会っている人や物との関係、自己との関係からなる三者関係状況に位置づけ、新しい課題として共有されることになる。

そして、今、ここでの関係の発展過程において、現在から未来へ向かってその解決・発展をめざすようなかかわり方がカウンセリングにおいて大切である。

この原理は、人間関係の過去の事実をクライアントにおいて明確化することをカウンセリングの主要な活動にする立場とは異なっており、過去への洞察を成立させるだけでなく、いくらほたらきかけても変わることのない過去を重要視するよりも、今、ここでの状況を実際に未来に向けて新しくする関係の動きを共に創ることに力点を置いている。

C. 肯定性の原理

人間の存在の仕方を、状況において、今、ここで活動している（かかわっている）あり方として、肯定的にとらえる原理。

この原理は、今、ここでの関係を肯定し、その先で、その関係を新しく発展させるには、何が必要か、どうかかわりがあるかを共に探求しようという未来志向性の原理と連結している。それは、クライアント一人、一人をかけがいのない存在として尊重し、現在の関係の仕方を受容・肯定した上で、今できていることを目立たせ、そこから未来に向かってさらに、より発展的な認識やかかわり方を、少しずつ共に新しく創り出そうとする原理である。

D. 心理劇法の原理

・心理劇法の原理は可能性の原理、役割性の原理、行為性（アクション）の原理、集団性の原理に細分される。心理劇法とは、行為による人間理解と可能性の探求の方法である。さまざまな設定された場面において、クライアント（個、集団）がいろいろな役割を取り合いふるまい、感じ考えることにより、表現や認識、行為を発展させる方法である。このような方法の活動を積み重ねることにより、クライアントが自発性、表現力、関係洞察力を伸ばし、日常生活を発展させる可能性を拡大していくことがめざされている。

(2) 一般的なカウンセリングと心理劇、および心理劇とアクション・カウンセリングとの関係

一般的なカウンセリングと心理劇の相違点は何であろうか。また、心理劇とアクション・カウンセリングの関係はどのようにとらえられるのであろうか。

まず、両者の相違点は、そこに主として展開する技法や役割の分化の仕方において明確にとらえることができる。

一般的なカウンセリングでは、カウンセラーとクライアントの一对一の関係を通常とし、言語的手段を中心として展開し、観客の存在は始めから予定されていない。

一方、心理劇では、活動における監督、補助自我、観客、演者、舞台という五つの役割機能の展開を特色としているが、その役割分化は場面の必要に応じて調節でき、一人の人がいくつかの役割を兼担して展開することも珍しくない。たとえば、心理劇では観客や補助自我を除き、監督がカウンセラーの役割を担ったり（演者はクライアントに対応する）、展開課程のある段階において、必要に応じて言語的手段を重視した心理劇を展開する（一般的なカウンセリングに近い状況設定）こともでき、三者関係構造を基盤として、状況に応じてさまざまな場面設定が可能などところにその特色がある。

故に、心理劇の立場の方が一般的なカウンセラーとクライアントの一对一の関係からなるカウンセリングの立場よりは広いと言えよう。

先に述べたように、心理劇の展開の仕方や技法、役割設定の仕方の一つとして、一对一の対人関係におけるカウンセリング状況を心理劇の中に位置づけることができるからである。

このような包括的で柔軟な展開が可能な心理劇のカウンセリング分野での普及がめざされ、一般の言語的やりとりを主とするカウンセリングとは異なる独自性を明確化するために、アクションカウンセリング（心理劇的カウンセリング）と名付けられ、カウンセラーとクライアントからなる状況においても、カウンセラーが心理劇の監督機能も担い、心理劇的技法の展開とカウンセリング関係の三者関係の発展を積極的に志向した特色ある実践が積み重ねられてきている。

2. アクションカウンセリングにおける心理劇技法の活用の仕方とその効果

(1) アクション・カウンセリングにおける心理劇技法^(注4)

関係学の原理に基づき、三者関係の発展を志向するアクションカウンセリングにおいては、三者面談法を基盤的構造とし、心理劇の多様な技法が活用されている。

心理劇のそれぞれの展開領域（看護、発達臨床、カウンセリング、教育、産業心理等）で特色ある技法が開発されている中で、ここでは、特にアクション・カウンセリングにおいて、重要な基本的技法をいくつか取り上げ、その内容の説明と期待され得る効果について述べることにする。

A. 三者面談法

アクションカウンセリングの場の構造は三者関係を基本にして展開し、その基盤的技法となるのがこの技法である。

三者面談法は我が国で開発された三者関係の原理にたつ相談技法であり、カウンセラーが二者でクライアントが一人の場合も、クライアントとその人と親しい人（家族、友人等）とカウンセラーから成る三者の場合もある。三者とは人の数を必ずしも意味せず、カウンセリング場面を構成する物（玩具、テスト、課題）も一人になりうる。

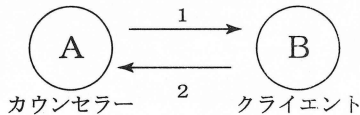
いずれにしろ、どのような場面においてもアクションカウンセリングでは、三者関係の原理が展開し、カウンセリングにおけるクライアントとカウンセラーともうひとつのもの（人、物）の三者よりなるチームによる三者的関係力動の発展が常に図られている。

一般的なカウンセリングは、通常カウンセラーとクライエントの二者によって行われているが、そこにも、もう一人の人や共にかかわれる物を加え、相互的にかかわり合いを活発化し、三者（他者）関係の状況を積極的に設定することにより、カウンセリングの新たな発展を生み出しやすくすることができよう。

このような三者面談法における三者関係の発展的特性は、次のように説明できる。

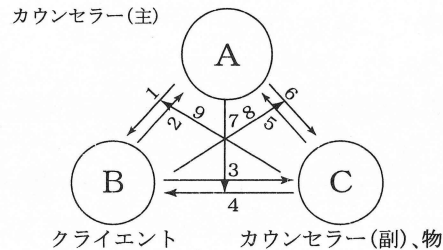
- ① 2人のカウンセラーのあいだで役割分担が可能である。主にカウンセラーAとクライエントとの関係に、副カウンセラーBが媒介的、援助的にかかわることにより、関係の力動的発展が促進されやすい。
- ② 活動に参加し、関係にかかわりながらも、三者関係では他の二者のやりとりを残りの一者が物理的にも、心理的にも距離をおいてとらえることができやすく、二者択一的思考や固定した視点を変化させ、関係の客観化や視点の移動、洞察が成立しやすくなる。
- ③ 図1.(3)のように、いろいろな関係通路が成立するので、二者の面談法の場合に比べ、関係が相互にかかわり合うような力動的変化が生まれやすい。二者間の関係へ他の一者が意図的にかかわるような技法（関係へ関係する技法）による媒介的発展も可能である。

二者面談法



(a)関係通路数(2)

三者面談法



(b)関係通路数(9)

図Ⅲ-2 カウンセリングにおける関係通路

以上のような三者関係の発展性を把握し、通常の二者からなるカウンセリング場面に心理劇的技法を活用したアクションカウンセリングを部分的にでも展開すれば、カウンセリングをより多面的に発展させ、日常生活の発展につながる効果をあげることが可能になるであろう。

B. アクションソシオメトリー法（アクションソシオメトリー）

日常生活における諸関係のかかわり合い、絡み合いをアクションを活用して目に見える形に構造的に描出し、そうすることを通して、状況理解や自分や人への気づきを増やし、ある集団における（家族等）人間関係の強さ、偏り、希薄さによる問題点を客観化し、人間関係ネットワークの再構築や強化への意欲を育てる技法であり、いくつかの種類がある。

- ・物媒介法——椅子や人形等身近にある物を使って、向きや距離等で家庭内や学校などの人間関係や物関係において問題となっている状況の基本的関係構造を表現する。
- ・ストップモーション法——物や人との関係へのかかわり方を特徴的な動作と向き、表情、距離等を媒介に静的に表演する。

C. 場面描演法

日常生活の課題場面を絵に描いて再現したり、再演してみることににより、日常生活状況の客観化や自己や他者への気づきを広げたり、洞察を深める。

- ・再現描画法——ある出来事の場面を絵に描き、その描画を媒介にそこに描かれている人間関係や各人の内面について話し合う。
- ・役割描画法——「子どもが祖母に対して我儘を通そうとしている時、あなたは、どのように子どもや祖母にかかわっていますか」等と課題場面について聞きながら、空間、物（おもちゃ）等を想定し、課題場面を再演して、そのアクション体験を媒介に、話し合う。

D. モノローグ技法

まわりに聞いて反応する人（観客）がいる状況において、自己が考えたり、感じていることを次々と独り言のように言語化することにより、状況における自己の確立が促進され、観客と話し合うことで自己洞察や状況認知の幅も広がる。また、カウンセラーにより、その場にはいない人の感じているであろうことや訴えを独り言のように独白するモノローグの技法が展開される場面においては、観客の役割をになったクライアントの、その人の内面への気づきや、その人の存在への配慮を促進しやすい。

このように、モノローグは、クライアントに受け入れやすいかたちで、自己や他者への認識を深める補助自我機能を発揮する技法である。

E. フューチャープロジェクション（未来投影法）

現在状況と未来との関係を意識し、いま・ここの状況における活動に肯定的、積極的にかわり、それを未来の発展につなげる意欲と態度を形成・促進する技法。具体的には、必要に応じて、未来の一定の時間を決め、その時がいま、ここであると設定し（時間操作による場面設定）、その時間における新たな変化と発展の実現を演じ、現在の活動の発展とそのような未来の実現とのつながりを強化するとともに現在の活動への参加意欲も強める。

- ・明日——「この会を終えて、明日、職場に戻った時、同僚にこの会での研修をどのように報告しますか。やってみましょう」
- ・X年後——「10年後の私の家族」はどのようになっているでしょうか。また、どのようになっていたいですか。それぞれの役割を想定して演じてみましょう」

F. 役割交換法

ある場面の自分（クライアント）と相手の関係を考えるために、相手の役割（上司、子ども、姑等）を自分が演じたり、自分の役割を他者（カウンセラー）が演じる役割設定をし、両者で問題が生じている場面のやりとりを展開してみる。途中で再び役割を交換したりして、相手の立場における感じ方や相手からは自分がどのように見えるか等、役割を相手と交換したり再び元に戻すことにより、視点が移動し関係認識の幅が広がり、他者理解や自己の客観視が促進される。さらに、新しい自己のふるまい方の可能性の探求をカウンセラーと共に行うことができ

る。

G. ロールプレイ技法

固定しがちな日常生活の役割関係では得られにくい多様な場面におけるさまざまな役割を取ってふるまう体験を積み重ねることにより、関係への気づきや役割の担い方における柔軟性と行為の可能性を高める。

人の状況における役割の担い方は、その行為における自発性、創造性の発現レベルによって、役割取技、役割演技、役割創技に分類される。

ロールプレイを初めて経験する人には、役割取技レベルの日常的なふるまいやすい役割におけるウォーミングアップ的活動において、自分以外の役割を担ってふるまってみることに慣れることがめざされるのが普通である。

H. 空き椅子（エンプティージャー）の技法

その場にはいない不在の人物や自己の一部分を他者として、その他者が自己の向かい側の空き椅子に座っていると想定し、そこへ話しかけたり、途中で自分がその椅子に移動して他者の役割を取って、それまで座っていた椅子に自己が座っていると想定してはたらきかけたりする。そのような椅子を移動する展開を通して、他者や自己への理解、視点の移動による自己客観化、状況認知の拡大等を促進する。

以上において、アクションカウンセリングにおける基本的な心理劇技法の内容とその一般的な効果について述べてきたが、実際の実践展開では、常にAの三者面談法で説明されているような三者関係の基本構造を基盤として、カウンセラーが状況に応じて、臨機応変に多様な技法を導入・展開することが必要とされている。

これらの心理劇技法は、関係学の立場からは、主としてクライアントの物・人・自己のどの関係に、どのようにはたらきかけ（内在、内接、接在、外接、外在）、主としてクライアントの何（情緒・認識・行為）におけるどのようなかかわり方の変化・発展を促進するのかというような対象や方法、機能などのさまざまな観点から、理論的枠組みを構成し、多様な技法を分類し体系化することが可能である。

(2) アクションカウンセリングの技法の展開

先に延べた心理劇の技法が実際にアクションカウンセリングにおいて、どのように活用され、結果としてどのような効果がとらえられるかを明らかにするために、福祉作業所の利用者の保護者（個、集団）や本学学生がメンバーとして参加し展開したアクションカウンセリングの実践例（4ケース）をここで報告する。そして、それらの実践例に対応させて、技法についての過程分析、結果についての効果分析と考察を行うことにする。

A. 課題の劇化を中心とする実践例（クライアントK福祉作業所の利用者の保護者）

<目的>

相談課題の中心的場면을劇化し、その活動での役割交代によるクライアントの視点の移動、他者への共感、役割行為の幅の拡大をねらう。

<展開>

- ① 「作業所から帰宅すると、『今日は何をしたの』と子ども（息子）に聞くのだが、めんどくさそうに『ひも』、『木工』とか、『わかんない』としか答えなくて、さっさと二階の自分の部屋へ行きたがるようになった。子どもとの会話やかかわりをもっと豊かにするには、どうしたらよいか」という保護者（母親）から提起された相談課題の一つを場面描演法で劇化する。
- ① クライアントとカウンセラーで母親と利用者（青年期にある息子）の役割を分担し、両者の帰宅時のかかわり場面を設定し、いつものやりとり場面を演じてみる。その次に、両者の役割を交代して、同じような場面を演じてみる体験をする。（役割交換法）
- ② 二つの役割体験についての感想や発見を、両者で話し合う。母親が息子の役割を担い、カウンセラーが母親の役割を担ってやりとりをした場面に焦点をあて、そこでの新しい関係の展開や他者理解についての話し合いを深める。
- ③ カウンセラーが、自室ですごしたくなる利用者の気持ちをモノログで表現し、共に過ごす茶の間での時間と個室で過ごす独りの時間の意義について話し合う。（モノログの技法）
- ④ 再度、帰宅場面を劇化し、役割交代をしながら、「今日は、何をしたの」と言う毎回、同じような言葉かけによるかかわり方以外の新しいかかわり方をあれこれ考えながら演じ（例－母親が新しく買ったセーターを見せて、それと似合うズボンの色についての相談をもちかける）、新しい出会い方と役割行為の可能性を拡大する。（ロールプレイ技法）

<考察>

母子関係（母親との適当な心理的距離を保とうとし、自分なりの自立を志向する青年期の息子と、小さな子どもへかかわる時と同じように、生活管理的にかかわりがちな母親との関係）の固定化における問題は、たびたびカウンセリングにおいて相談課題となる。青年期にある利用者は知的な状況理解の発達面では保護者の援助を必要としながらも、青年としての心理的自立性を高め、部分的にでも母親との心理的距離を設定し外接関係を保ちたい要求を強めている。そこで、そのような利用者へのかかわり方をどのように新しくしていくかが、多くの母親の共通課題となってくるのである。

ここでは、母親における青年期の子ども（利用者）の内面への理解や自己と他者（利用者）における感じ方の違いへの気づきを、アクションを媒介としたインパクトと楽しさ（playfulness）のある展開において促進できた。

また、自己のパターン化した固定的なかかわり方を変化させ、柔軟で多様な役割行為を開発するには、ロールプレイ体験の積み重ねが極めて有効であり、個と集団が相互的に発展し、笑い共感、親密性と多くの気づきが育つような、集団の力動性を活用したグループにおけるアクションカウンセリングの展開の併用も望まれる。

B. 物（描画）媒介による三者面談法の展開（クライアントーK福祉作業所利用者の保護者）

<目的>

クライアントとカウンセラーの二者において展開するカウンセリング場面に、機能的に一者となりえる物を第三者として加えることにより、関係の通路を増やし、三者関係的な相互媒介的相談関係の発展を創造し、クライアントの認識と行為の発展を促進する。

補足——知的発達障害の利用者とのかかわり方についての問題意識を持つ保護者とのカウンセリングでは、カウンセラーと利用者とのカウンセリング場面の設定を含む展開は稀である。。

しかし、ここでは、利用者もカウンセリングへ参加する場面を設定し、そこで言語性や表現意欲を伸ばすことを課題とした開発的カウンセリングを実践し、非日常的で楽しめる課題活動も展開した。そこでの活動の成果である描画を、次に連続して展開する保護者とのカウンセリング場面に、三者関係を構成する一者（物）として導入し、物を媒介とする三者関係の発展をめざした。

<展開>

- ① カウンセラーは利用者との開発的な課題活動における全体的な利用者のかかわり方の特色や、今回の活動でとらえられた変化などについて保護者に報告する。
- ② カウンセラーは、結果がはっきり事実として残る利用者が描いた描画に焦点を当て、その活動の展開課程における利用者の言葉や身体表現や描画表現の発展について、カウンセラーのかかわり方と対応させながら細かく具体的に報告する。
- ③ 保護者は描画を鑑賞し、「小さいときは、決まったパターンの同じ人の絵しか描かない子で、大きくなってからは全く描くこともなく過ごしていたのに、今日は昔の決まりきった人の絵と違うものを描いたんですね」と驚きと喜びの表情で、何年ぶりかで見ることのできた息子の描画への感想を述べる。
- ④ カウンセラーはウォーミングアップの活動を経て、横でカウンセラーも利用者と同じようにあれこれ迷いながら共に描いてみる活動をしたり（ダブリングの技法）して、評価する人でなく、共に描くことを楽しむ人が横にいる状況関係が媒介になり、利用者の自発性や表現意欲が高まりだす（自己関係の変化）発展過程を実際に再演しながら場面描画法によって説明する。

さらに、物環境の設定（興味をひくような筆記用具や色、玩具を用意し、自己選択を尊重する）や人の位置、やりとりの展開等の関係状況を物媒介に描出し、具体的な描画の発展部分と状況演出の関係への理解を促進する。（アクションソシオメトリー法）
- ⑤ 所員とカウンセラーと物の三者関係状況における所員の自発性や表現意欲の変化、発展によってもたらされた目に見える具体的事実を手がかりにして、描画以外の活動、日常生活において保護者によって応用、実践しえる発展的な状況作りについて話し合う。
- ⑥ 話し合いにおいて親子関係における＜やらせるーやらされる＞という固定的勾配関係を変化させ、利用者と保護者の関係変化を心がけ、保護者の役割行為の幅の拡大と柔軟性を高めることをこれからの新たな生活課題としていくことを確認し合う。
- ⑦ 最後に、描画のコピーを保護者にプレゼントし、帰宅後にその描画を媒介に利用者とのように出会い、どのような新しいかかわり方を展開できるかを想定し、いくつかの可能性を演じてみる（フューチャープロジェクションの技法。ここでは、父親も交えたり、描画を冷蔵庫に貼ったりする活動が展開した）ことにより、今、ここでの学びを未来の実践に生かす

意欲と行為を促進する。

＜考察＞

利用者也カウンセリング（開発的カウンセリング）に参加する機会を創ることにより、利用者は立派に関係発展を担う役割を果たし、そこでの関係発展の事実を示す結果としての物（描画作品）が、カウンセリングの発展の貴重な手がかりとなり生かされる展開はまさに三者関係の構築とその発展性の具現化を示していると言える。

障害のある青年期の子ども（利用者）の保護者は、ともすると加齢と共に、利用者のかかわり方の変化・発展、生活の充実への取り組みへの意欲がしばみがちになる。そのような状況で、たとえ描画における小さな変化・発展であろうとも、「人間は、いつでも変化・発展する可能性を有する」という共通認識を保護者と共有でき、所員へのかかわり方の手がかりを得ることができることにより、日常生活への活用の意欲を高める実践となった。

C. アクショングループカウンセリングの展開（グループメンバー K 福祉作業所保護者グループ）

＜目的＞

K 福祉作業所の利用者の保護者から成るグループメンバーの特色に対応させて、グループカウンセリングの目的を次のように設定した。

＜自己関係＞自分の感情・認識への洞察とアクション媒介による自発性・情緒の開発。新しい取り組みにより変化を創り出すことへの意欲の促進。

＜対人関係＞メンバー相互における課題の共有による共感、癒し、理解の促進。対人関係性とグループの凝集性の発展。

＜対物関係＞利用者の生活の充実に役立つような、近隣や公共機関における参加可能な活動や新しい福祉関連情報の伝達とその活用実践体験の交流

（展開課程）

個、集団、課題の相即的發展をめざしたグループにおけるアクションカウンセリングは、心理劇の一般的な展開と同じく、次のような活動段階を踏んで展開する。

- ① ウォーミングアップ活動による導入期（参加意欲を高め、日常の固定的役割を離れ、自発性・創造性を発揮して新しくふるまいやすくするための導入段階）
- ② 展開期（個々の問題・課題の発表後、それらを類別し、集団で共に劇化して取り組む課題を明らかにする段階）
- ③ 発展期（問題・課題に多面的にアプローチするための場面を組み、演者や観客等の役割行為を通して認識や行為の発展が促進される段階）
- ④ 終結期（心理劇のそれぞれの役割体験＜観客、演者、補助自我、監督（カウンセラー）、舞台＞における感想・発見を発表し合い、話し合いを共有し、自他のそれぞれの問題・課題への共感と洞察を深め合う（分かち合い＝シェアリング）。さらに、それらをどのように日常生活に生かすかを考え、心理劇のアクションと未来の変革とをつなげる段階）

＜展開＞

グループメンバー10名、活動時間－2時間

- ① ウォーミングアップ（物媒介対人関係発展の技法による心理劇一隣の人に「旅のおみやげ」を渡す劇と「私の得意な事」を動作で演技し皆でそれを当てる活動を行う。その後、このようなウォームアップのための短い劇を演じてみての話し合いで、感じたこと、気づいたこと、アクションで表現することやできていることを目立たせる肯定的捉え方、表現による気持ちの高揚等について話し合う）
- ② 過去5年間の個別カウンセリングにおいて得られた、家族メンバーによる利用者との関係の変化・発展をもたらした工夫や知恵の実践事例情報を本研究者が匿名でまとめたプリントを皆に配る。それを共有しながら、その事例の中でグループメンバーが実践者になっていてオープンに扱えるいくつかの事例に焦点を置き、それらの実践者がレポーター役を担い、メンバーからの質問にも積極的に応答する役割を担う。
- ③ 集団で話し合いたい問題・課題を募りまとめた結果、「利用者のお金の使い方をどのように指導したらいいか」と「独り言が激しい時の対応の仕方」についてが集団課題となり、利用者の個別的生活状況について質問したり具体的場面を明らかにする心理劇（場面描演法）やその場面を劇化したり、役割交代（役割交換技法）をしながら指導や対応の可能性を探る心理劇の展開（ロールプレイ技法）がなされる。
- ④ メンバーによる役割を担ってふるまってみての感想や発見を発表しあう。
アクションを媒介にしたグループ活動の結果として利用者の情緒や認識の仕方への理解を深め、さらに、利用者の行動の問題ばかりに注目せずに、利用者が今できていることを基盤にして、彼らの生活空間をどのようにより豊かにできるかという可能性について話し合われる。
- ⑤ 主体的にふるまうアクションが展開するグループに参加しての感想と発見を発表し、それらをこれからの利用者との生活に、どのように個別に生かせるかについて話し合い、活動成果と日常生活とのアクションレベルでのつながりを強める。（フューチャープロジェクトの技法）

<考察>

グループカウンセリングにおいては、メンバー間における多様性（メンバーの年齢、性別、利用者の生活能力等における）と共通性（課題・問題、福祉的ニーズにおける）の存在が集団の発展的力動をもたらす要素となるので、多様性が生かされる技法の活用が有効である。

アクショングループカウンセリングでは、問題解決中心の個別カウンセリングと比べて、アクション媒介の集団の力動性がより高まり、いきいきした非日常的雰囲気の中で、より変化に富んだ力動的な開発的、癒しの効果が生まれやすい。

また、そのような力動的展開においては、カウンセラー（監督）のみが活動の方向性を決めるのではなく、メンバーの自発性と集団の凝集の高まりが新たな活動の発展と方向性を生み出し、ハプニングを含めた生き生きとした展開が期待できる。

そのためには、予想を超えた展開に対応するカウンセラーの柔軟性と洞察力が不可欠であり、今回のグループカウンセリングにおいては、活動の方向性を担う役割をカウンセラーだけ

ではなく、保護者として地域に密着し日々の実践を積み重ねている年長者のメンバーも方向性機能を主導的に分担し、有益な福祉情報や保護者自身の加齢に伴う不安についてなどの話題を共有する活動が展開できた。

それは、カウンセラーの予想を超えて、メンバーの必要に応じた福祉カウンセリングやピアカウンセリング的な内容の充実を結果的にはもたらすことになった。

D. 空椅子（エンプティーチェアー, empty chair）の技法による開発的なアクショングループカウンセリングの展開（グループメンバー 本学学生）

＜目的＞社会福祉士を養成するための必修科目＜社会福祉援助技術各論1＞においては、対人関係の理論と実践力の学習が必須とされている。その科目を履修する学生を小グループに分け、物理的な座席の移動による視点の移動とグループメンバー同士のアクションレベルの相互作用を媒介として、各メンバーが自己における自己、人、集団との関係の仕方の特色やそれらの変化・発展への初歩的な気づきを深めあうこと、個と集団の対人関係における相互的發展過程を実際に体験することを目的とした。（ここでは、13名の学生と3名の指導者チームによるグループ実践を報告する）

＜展開＞

1. ウォーミングアップ活動による導入（個別、二人組、四人組でレクレーション的效果のある課題に取り組み、対人関係における親和性を高め、自発性、表現力を発揮する活動を十分に時間をかけて展開する。詳細は省く）
2. 空椅子の技法による心理劇活動の展開の仕方を説明する。（グループメンバーは、円形に並んだ椅子に座っている。円形の真ん中に、空き椅子を置き、各自がその椅子に、想像上で誰かを座らせ、その人に向かって、普段言えなかったこと、今言いたいこと、考えていること等を順に、語りかける心理劇であることを説明）
3. 誰を想定するかを自己決定する課題を提示し、筆者と2名の補助自我（専攻科学生）からなる監督グループが簡単なデモンストレーションを行う。
4. 順に、空き椅子に向かって、メンバーは語りかける。（この心理劇技法は初めての導入になるので役割取得体験レベルを重視し、短時間で、語りかける演者の役割を次のメンバーと交換していくオムニバス形式で展開する）

展開例——「同じ家に住んでいるのに最近合っていないね。素直に言えないけど、ちょっとは、尊敬しています。（続く）」（母親に）

各メンバーが椅子に座っていると想定した人へ話しかける役割を短時間であるが演じた後に、観客であるメンバーが椅子に座っている人がどんな人かを当てたり、演者に質問したりした後に、次の人が演者の役割を担うように展開していく。

5. 全員が演者と観客の役割を経験した後に、監督は全員で共有しやすい課題場面を演じた一人を選び、先程、展開した椅子に座っている他者とのやりとりの続きを演じる場面を設定する。演者が椅子を交換することにより、他者の役割を演じるような役割交代の技法をまじえながら、課題内容の掘り下げが展開する。
6. このグループアクションカウンセリングにおける関係発展評価を各メンバーが自己評価す

表1 関係発展評価表

—自己との関係— ここでの活動を経て 私は いま…	—人との関係— ここでの活動を経て 私は いま…	—集団内関係— ここでの活動を経て 私は いま…
1. 落ち着いていられる	1. 自分一人ではないと感じる	1. 集団の動きで自分をはっきりしている
2. 素直な気持ちが育っている	2. 人と話してみたいくなる	2. あたえられて役割がとれる
3. 気持ちが高まっている	3. ほかの人と自分とでこの場をつくっていることにきづく	3. 集団の動きを外からとらえることができる
4. 広がっていくのが感じられる	4. 一人一人の動きが見える	4. 集団の動きで自分が変化するのがわかる
5. 気持ちの動くのがわかる	5. ほかの人の動きをみていて楽しい	5. 自分がとれる役割がわかる
6. いく通りにも自分を感じられる	6. ほかに人に包まれている感じがする	6. 集団に位置づいている感じがする
7. はっと気づく自分がわかる	7. 気持ちをひらいて人と安心していられる	7. 集団のメンバーの一人であることがわかる
8. 自分をはっきりととることができる	8. 自分から話したりふるまったりできそうに思う	8. 自分から役割を見つけてとれる
9. 自分のよさを見つけることができる	9. ほかの人と一緒にするのがうれしい	9. 集団の動きにのっている感じがする
10. 充実感がある	10. 人がふるまいやすくなるようにしたい	10. 自分の動きで集団が変化するのがわかる
11. 自分のまとまりが感じられる	11. その人らしさが素晴らしくみえる	11. その場で必要な役割がとれる
12. 今していることが次のステップになると思う	12. お互いに育つのが感じられる	12. 集団の動きを一緒につくっている感じがする
13. 新しい自分を発見できる	13. その人らしさが育つ場面をつくれる	13. 集団と自分が共に変化するのがわかる
14. 目の前が開けて進めるように思える	14. 先の見通しをたてることができる	14. 集団の発展に必要な役割がとれる
15. これからの自分が楽しみである	15. どこにでもつながりをつけてふるまえる	15. 集団のどこにいても発展の見通しをたててふるまうことができる

るために、関係発展評価表（表1）に各自書き入れる個別活動をする。

7. グループメンバー全員で、今回の活動に参加しての感想・発見を発表し、それぞれの発見と成長をグループ共通体験によって創造できたことの喜びを共有し、ここでの学びと先でのソーシャルワーク活動との関連を確認して終わる。（90分経過）

<考察>

効果の測定には、観察法や、アンケート法、自由記述法などがある。ここでは、メンバー全員による関係学研究所が開発した「関係発展評価表」^(注5)への記入内容と自由記述の内容分析によって、この活動の効果の考察を進めることにする。

表1に示すように、関係発展評価表の項目は自己との関係、人との関係、集団との関係からなる3つの関係枠に分かれて、それぞれに15項目ずつ設定されている。この自己評価活動は、メンバーがグループ活動終了後配布された表の項目を読みながら、「今の自分に当てはまるな」と感じられる項目に（いくつでもよい）○をつける作業をし、さらに自分のつけた○の中で特に強く感じている項目には二重丸をつける作業をしてから、自由記述を行う手順で実施した。

表2 項目別被選択数

関係枠 項目	自己と の関係	人との 関係	集団と の関係
1	13①	16②	8
2	13①	14③	11
3	12	11	4
4	7	8	11
5	13①	17①	12
6	5	6	10
7	11	8	17①
8	7	14③	10
9	6	13	13③
10	13①	12	8
11	3	11	9
12	12	7	17①
13	9	1	5
14	5	1	2
15	9	6	0
総 計	138	145	137

○印…被選択数の高い項目

○の中の数字は順位を表す。

表3 メンバー別関係発展項目選択数

関係枠 人	自己と の関係	人との 関係	集団と の関係	総計
A	11	10	9	30
B	9	10	9	28
C	15	9	9	33②
D	8	11	13	32
E	10	8	11	29
F	10	12	11	33②
G	8	11	8	27
H	12	12	12	36①
I	9	7	7	23
J	5	10	11	26
K	4	8	5	17
L	12	11	7	30
M	9	8	10	27
計	122	127	122	371

○の中の数字は順位を表す。

この発展評価活動を導入したねらいは、関係学の評価即教育の立場に立ち、効果の測定をすることと同時に、自己評価活動によりメンバーの自己の育ちや感性への気づきを促進することにある。

この関係発展評価表を用いた自己評価活動の結果は次のように、整理できた。(表2, 表3)
上記の集計結果からは、次のようなことが明らかになった。

<表2について>

- ・どのメンバーも、各関係枠におけるいくつかの発展内容を表す項目に、○をつけ、自己の発展評価に当てはまる項目を選択できている。これはメンバー全員が各関係枠において、なんらかの自己における変化・発展を自覚できたことを表しており、そこにこのグループ活動の効果の一面を○のついた数から量的にとらえることができる。
- ・自己との関係における発展項目の選択数の合計は138、人との関係では145、集団との関係では137であり、どの関係枠においても、参加メンバーは、ほぼ同じ量の関係発展項目を選択しているが、3つの中では、人との関係における項目をもっとも多く選択している。
- ・各関係枠の項目ごとに、選択される数(被選択数)を得点として集計すると、次のような項目が得点の多い項目になることが分かった。

自己との関係……1. 落ち着いていられる, 2. 素直な気持ちが育っている。5. 気持ちの動くのがわかる, 10. 充実感がある

人との関係……5. ほかの人の動きを見ていて楽しい(全員が選択している), 1. 自分一人ではないと感じる, 2. 人と話してみたくなる, 8. 自分から話したりふるまったりできそうに思う

集団との関係……7. 集団のメンバーのひとりであることがわかる, 12. 集団の動きを一緒につくっている感じがする, 9. 集団の動きにのっている感じがする, 5. 自分がとれる役割がわかる

これらの結果からは、高得点項目群のなかでは、自己との関係における項目1, 2や人との関係における項目8, 集団との関係における項目7, 9等のような自己の各関係枠への内在的なかわり方を表す項目が半数を占めていることが明らかになった。この事実は心理劇的技法を導入したこのグループカウンセリングによる、多側面(自己, 人, 集団)における発展促進性がとらえられると共に、細かく数字を分析すると、とりわけメンバーの内在的なかわり方、内在性を発展させる効果が顕著であることが究明できた。

<表3について>

- ・表3は、メンバー別に、各関係枠のどの項目に対して○(丸印…自己発展項目)をつけたかを調べ、○を一点、二重丸を二点に点数化して、メンバー別に自己発展の得点として集計した結果を示す。表3からは、得点の平均値28.5が把握でき、平均得点からは、メンバーは、平均的には、45ある全項目の半数以上に○をつけていることが判明した。
- ・この個別の自己評価は、評価基準が全く個人の判断にまかされており、得点が多いからいい、少ないからよくないということはないという前提のもとに、「活動後に感じていることに当てはまるなと思える項目に、素直な気持ちで自由に○をつけるように」という指示の基で

行ったので、個人差が数字としてはっきり出てくる。その数字を手がかりにして、メンバーの自己の感情の動きやそれへの気づき、人とかかわりにおける気づきや認識の仕方の特徴における個別性を意識化したりする活動につなげられていくことが、自由記述欄での内容から分かった。

- ・細かい評価項目に応じて自己評価を試みる活動は、評価即教育の活動となり、今、ここでのアクション体験を、「楽しかった」という体験レベルの大ざっぱな感想で流してしまうことなく、細やかな内容の項目に触れることで自分だけでは意識化しにくい自己や人への豊かな感受性や気づきを育て、伸ばすことが可能になっている。
- ・ひとり、ひとりの自己評価の得点傾向から、個別の個人指導についての手がかりや心理劇技法の効果特性についての有力な情報を得られる効果も大きい。

<自由記述から>

内容の分析からは、自己の発展を自己評価し、皆で発展における気づきや感想を分かち合うこと（シェアリング）による、自己の感性、成長への気づきへのいきいきとした記述が多く、アクションとグループによるインパクトと楽しさ（プレイフルネス）のある活動への肯定的評価が目立った。メンバーに共通な感想・発見の内容は、次のように整理できた。

- ・初めての内容だったので始めは不安だったが、次第に落ち着き、緊張もありながらワクワクするような楽しさを感じた。
- ・みんなでお互いの話をしっかり聞き合うことで、よく知り合え、親近感が持てるようになった。
- ・いろいろな課題に取り組んでいるうちに、次々に考えが生まれ表現できるようになり、思っていたより以上に集団の中でふるまえた自分に自信がついた。
- ・集団の関わりの中で、表現していくと、情緒が高まり、アイデアや考えも活性化する。
- ・他者の表現に観客としてかわることにより、普段気づかないでいた自分のことに気づかされたり、自分を振り返り、自分の内面を高めるきっかけを得られた。
- ・他者と感じ方が同じ時は共感の喜びを感じ、感じ方やふるまい方が違う時はびっくりすると共に、刺激を受け、ひとりひとりの個性の違いのすばらしさに感動した。
- ・みんなで同じ課題に取り組むかわり合いの中だからこそ、集団の力が働きいろいろな発展が生まれるのだと思った。

以上のような、関係発展評価表における発展評価項目の選択数と自由記述、および最後のメンバー同士の体験、感想、発見の発表によるシェアリングにおける情緒的盛り上がりや集団の凝集性から、開発的なねらいのもとに展開したこのグループカウンセリングの効果が各メンバーにおいてとらえられることが明らかになった。

3. 一般カウンセリングへの心理劇技法導入の手がかりと手順

心理劇技法を実際のカウンセリングにおいて展開し、アクションを媒介として発展するカウンセリング＝アクションカウンセリングを本格的に実践するためには、カウンセラーが一定程

度の訓練コースを体験し心理劇技法に習熟し、アクションカウンセラーとしての資質の向上に努める必要がある。

アクションカウンセラーに必要な資質として、土屋明美は次の五つを挙げている。

「①行為化における『共にそだつこと』への信頼

②関係状況の把握にすぐれていること

③力動的な心理・物理的空間における役割行為（ex. 役割取得・演技・創技）が可能であること。

④開かれた三者関係の形成・発展への洞察が成立すること。

⑤行為・認識・情緒のズレや一致に敏感であること」⁽⁴⁾

このような資質は、他の立場のカウンセラーにおいて必要とされる資質と重なり合う部分も多いが、三者関係とアクション機能を不可欠とするアクションカウンセリングにおいて特に重視される独特の資質も含まれている。

言語的手段を中心とする一般的なカウンセリングに心理劇的技法を導入し、部分的にアクションカウンセリング的展開を実践しようとする場合には、クライアントの関係把握の特色（一者関係的、二者関係的、三者関係的）や、クライアントの今、ここでの問題意識等を手がかりに、カウンセラーは統合的観点から劇化すべき相談課題を把握し、カウンセリングのどのような段階で、クライアントにおけるどのような変化を促進するためにどのような技法の導入が有効かを考えて、アクション場面へ移行することになる。

その移行のプロセスでは、「それは、たとえばこういうことですか」とカウンセラーがクライアントの日常のふるまい方を演じてみてから、観客の役割を自然に担ったクライアントの意見を聞いたり、「他に、いつもと違った応答の仕方としては、どんなやり方が考えられるでしょうね」と役割行為の新しい可能性について、初めは言語レベルにおいて両者で考え合うところから始めるやり方が無理のない手順となろう。

そして、次の段階で、「それを実際にいろいろなかわり方で、ちょっと演じてみましょう」とはたらきかけるような劇化への導入が、無理のないアクションへの移行を実現するであろう。

このような移行のプロセスを経ることにより、話し合いだけでは、クライアントにとって実感としてピンとこない状態が、アクションを媒介にし、演者や観客の役割を担ってふるまい、そこでの感想や意見を話し合う体験を積むことにより変化し、他者の気持ちへの理解や自分のかかわり方の偏りへの実感の伴った洞察が生まれてくるのである。

また、クライアントとカウンセラーが役割を交換してふるまってみると、いつも自分が担ってふるまっている役割を他者が演じるのを見る機会が成立し、自分のかかわり方を客観的にとらえて問題点に気づきやすくなったり、他者と共に、いつもと違う新しいふるまい方の可能性を探って、それを演じてみる活動へ発展させることも可能になってくる。

このような情緒、認識レベルのみならず、行為（＝アクション）レベルでの役割行為の拡大は、クライアントのその場を離れた帰宅後の日常生活における実践の拡大につながりやすく、そこに、アクションカウンセリングの有する大きな特色がある。ゆえに、カウンセラーの力量

は、クライアントのどのような行為の変化・発展に焦点を置き、どのような心理劇技法をいつどのように導入するかを見定めて、実践する力に現れてくると言えよう。

さらに、心理劇の展開が初めてのクライアントに心理劇技法を導入する時に、大切なこととしてウォーミングアップ活動を重視することを挙げたい。いきなり、ウォーミングアップなしに、課題解決的志向の強い場面設定をして心理劇技法を展開しようとしても、クライアントには、アクションの意義も解らず、すぐに場面に参加し役割を担うことなどはとても無理なことが多いはずである。

劇化は、適切なウォーミングアップを経て、行われるべきであり、ウォーミングアップは、アクションカウンセリングの効果を高めるためには、常に必要な欠くことのできない活動である。

そこにおいて、いつもの自分とは少し違う役割を演じてみる楽しさを味わえるような役割取得レベルのロールプレイ体験を踏んでから、次に状況設定のある役割演技体験へとクライアントが段階的に進めるように、カウンセラーは考慮すべきであり、そのステップアップに必要な時間の個人差はかなり大きいので、グループにおいても個別的対応が常に必要であることは言うまでもない。

ウォーミングアップのための活動としては、自発性を高め、簡単に誰にでも役割を担えて、楽しくやれて個性も発揮できるような内容のものがたくさん研究開発されている。カウンセラーはクライアントの生活や年代などを考慮して、その内容を工夫して設定し、自らも共に参加してふるまう態度が大切である。(例1—旅のおみやげを隣の人に手渡し人になったり、受け取る人になり即興的に会話を発展させる。例2—自分の開いてみたいお店の主人になり、扱う商品について客と自由にやりとりをする。)

4. 総括的考察

本稿では、アクションカウンセリングの特性、技法とその効果および一般的なカウンセリングへの導入と手がかりについての考察を進めてきた。

アクションカウンセリングの特性に対応するその効果をまとめると、次のように述べることができる。

- (1) 自分以外の他者の感じ方、考え方は、自分とは異なっていることが多い事実に変更して気づき、他者における感じ方、考え方への多面的理解(共通性、類似性、差異性)、他者への配慮のある柔軟なかかわり方の開発等によって、人間関係におけるかかわり方を発展させる。(対人関係)
- (2) 心の中での思いや新しい考えを積極的に言葉や行動で表現する行為化、実践化の意欲を促進する。そして、場面を共有する他者から自分の行為へのいきいきとした反応を得ることによって、さらに自己の情緒や志向が深まりやすくなる。自発性、創造性、情緒、意欲の発展。(自己関係)
- (3) 多様な心理劇技法により、問題状況を客観化して、状況を関係構造的に把握するような関係認識を育てることができる。(集団状況関係)

- (4) カウンセリング場面でのアクションレベルにおける認識と行為の可能性の拡大は、社会（集団）における日常生活での認識と行為の実践における連続的な発展に連結させやすい。（社会・集団関係）
- (5) 言語レベルのやりとりのみではない、場面と役割が適切に設定された状況において、クライアントの主体的参加が促進され、情緒、認識、行為のレベルでの相互的なかわりにおける発展が創られ、共に育ち合える力動性がある。（物・人・自己関係）

以上のような五つにまとめられた内容にプラスして、最後にもう一つ強調しておきたいことがある。それは心理劇的技法の発展的展開においては、参加する誰もが、主体的に役割を担い、自発性を発揮することにおけるアクションレベルのいきいきした楽しさを他者と共有しつつ、情緒と認識と行為を統合的に人と共に開発できるという他には変えがたい三者関係の力動的発展性、対人関係媒介による共に育ち合える喜びと楽しさの存在である。

今後の研究の方向としては、更なる実践研究の発展を課題とし、人間生活の発展をもたらす、かわり方を育て合うアクションカウンセリングの理論と技法の発展と普及のために、微力ながらも貢献できることを願っている。

最後に、本稿をまとめるにあたり、実践研究の機会を与えて下さった十文字学園、私学研修福祉会、お茶の水女子大学の人間関係研究室に研修生として受け入れて下さった黒田淑子教授、および実践研究の場を提供して下さいなお茶の水女子大学児童集団研究会や授産施設「こぶしの森」の皆様と十文字学園女子大学、女子短期大学の受講生に心より感謝の意を表します。

（注1）創始者・松村康平。人間は関係の存在であることを明確にし、人間生活の諸領域の理論・技法・実践の科学として発展している。

（注2）モレノ（Moreno, J. L.）が創始。集団心理療法の中の役割行為中心法に分類されている。

（注3）三者関係の発展性を積極的に活用するカウンセリングであり、日本で初めて松村康平によって確立された。

（注4）心理劇の技法は、集団で共有可能な行為の仕方の総称である。創出・考案課程から分類すると、モレノによって創出された基本技法、諸外国の文献また海外での研修活動により紹介されているもの、日本の心理劇協会や関係学会の研究・実践活動等において開発されている技法などに分けることができる。

それらは、相互に影響を与えながら、独自性を発揮しつつ発展している。

（注5）関係発展評価表（日本心理劇協会・関係学研究所、松村・浜田・春原・土屋ほか担当、1988）用紙をもとにした、自己との関係、人との関係、集団との関係の項目からなる表を用いた。

（引用文献）

- (1) ロバート B. ハース「アクション・カウンセリングと過程分析」日本心理劇協会 1969
- (2) 松村康平 佐藤啓子『関係理論における原理と関係枠との関係』『関係学ハンドブック』関係学会編 関係学研究所 1994
- (3) 赤井美智子『3章諸技法の基礎理論』森省二編著「子どもの臨床心理」樹村房 1998
- (4) 土屋明美「アクションカウンセリングに関する研究(2)」日本カウンセリング学会第22回大会発表論文集 1989

(参考文献)

- (1) 松村康平「心理劇－対人関係の変革」誠心書房 1961
- (2) 土屋明美「心理劇的グループカウンセリングの考察」関係学研究第18巻 関係学研究編集委員会 1990
- (3) 黒田淑子他「日常生活におけるひらかれたカウンセリング(8)」カウンセリング学会大27回研究大会 論文集 1994
- (4) 黒田淑子「心理劇の創造」学献社 1989
- (5) 松村康平, 岩村佳代子「教育相談と心理劇」現代者 1970